

Maud Gonne, *The Autobiography of Maud Gonne* — A Servant of the Queen

門 脇 正 典

東亜大学 人間科学部 国際交流学科
e-mail:kadowaki@toua-u.ac.jp

本書は、Maud Gonneというアイルランドにおけるジャンヌ・ダルクとも称され、愛国運動に一身を捧げ、波乱に満ちた生涯を送った女性の自叙伝である。本書の構成は、本書を編集したA. Norman JeffaresとAnna MacBride Whiteによる、本書成立の背景の解説を記した“Introduction”，本書に關した出来事に関する年表が提示されている“Chronology to the Events Referred to in *A Servant of the Queen*”，本テキストに対する注である“A Note on the Text”，著者によって本書に対する思いが綴られた“I Saw the Queen”，“Foreword”と続いている。更に第1章の“Words Remembered”から、第17章の“Dusk”の本文に続いて付記された“Notes”は、本書成立の歴史的背景に解説を加えた“The Historical Background to *A Servant of the Queen*”と、本書において述べられている人名及び組織に注を施した“Notes on Persons and Organizations Mentioned in *A Servant of the Queen*”の2部に分かれている。こうした構成から本書は、上流階級出身にもかかわらず自らの出自に反抗し、美貌及び才気と冠絶した行動力を兼ね備え、近代アイルランド史において毀誉褒貶相半ばする、傑出した女性の興味深い自叙伝であると共に、近代アイルランド独立運動史に関する貴重な1次資料としての役割をも果たしている。

本書の本文が始まる前の“I Saw the Queen”という文章の中で、彼女はアイルランドのMayoからの帰途、列車の車窓から見た幻想的な光景について、次のように記述している。

その時、私は黒髪を風に靡かせている、背の高い美しい女性を目にし、それがCathleen ni

Houlihanだという事が分かった。彼女は脆い表面の石から石を飛び跳ねて沼を横切り丘に向かっており、その背後には白い小石が輝いて小道を作っていたが、その後闇の中へ消え去って行った。私は「あなたは、自由に至る道の途中に女王が足を載せる小石の1つです」という声を耳にした。夜の悲哀が私を捉え、道の背後に残された正にそれらの小石の1つであるという事が、余りにも寂しく思われ涙を流した。

今や歳を取り、勝利を得ているわけでもないが、私は自由に至る小道のそういった小石の1つである事の幸せを分かっている。¹

ここに記述されているCathleen ni Houlihanとは、アイルランドを象徴する女性の謂で、アイルランドの文学者W. B. Yeatsは、彼女に同名のCathleen ni Houlihanという戯曲を捧げ、彼女はこの戯曲の主人公であるCathleen ni Houlihanを演じて、極めて好評を博している。つまり、本書の副題に記されている、Queenとは本書の背景の時代にイギリスを統治していたQueen Victoriaではなく、このCathleen ni Houlihanを示唆しており、彼女は自分はアイルランドのしもべであり、アイルランド独立運動に一身を捧げたという感慨を、この神秘的なエピソードの描写を通して、象徴的に表現していると言えよう。

著者であるMaud Gonneは1866年12月21日に、イギリスのHampshire州、Tonghamで誕生した。父親はThomas Gonneという軍人で、当時は陸軍大尉であった。彼は彼女の誕生後間もなくして、アイルランドにおける反英活動の抑圧を強化する為、アイルランドにおけるイギリスの最大の軍事

基地Curraghに転任した。アイルランドはイギリスとは元来民族的にも宗教的にも異なる国であったが、12世紀にイギリスに併合され、以後はイギリスの植民地となった。しかし、アイルランド人に対する様々な差別待遇や搾取などの為、アイルランド人はイギリスに対して反感を募らせるようになり、様々な反英活動が行われるようになった。1871年Maud Gonneが4歳の時、彼女の母が僅か27歳で結核の為亡くなり、彼女はロンドンにおける母の伯母の家に身を寄せた後、10歳の頃からヨーロッパ大陸へ渡り、フランス人の家庭教師のお陰で、フランス語も英語と同じように流暢に話せるようになる。

その後彼女は、Oscar Wildeなども魅了する美貌と魅力でダブリンの社交界の華となる。しかし、彼女が19歳の時Midlandsの舞踏会に出る為に滞在した家で、その家の人の命令によるeviction（追いたて）にあった数家族が、僅かばかりの家具にしがみ付き、やがてその夜の寝場所を探しに闇の中にさ迷い出る様子を目撃する。当時アイルランドの農業技術は遅れている事もあり、その多くはイギリス在住の不在地主であった地主達は、小作契約が切れると、牧畜による毛織物の輸出の方が儲かったので、小作人達を立ち退かせて牧草地にする為、このevictionがアイルランドの各地で行われていた。そしてこの悲惨な光景を目撃した事が、彼女をして反英運動に身を捧げる契機となる。

彼女の父も土地問題に同情を示し、アイルランドの自治擁護の為、立候補する決心をするが、間もなくチフスに感染して、1886年に僅か50歳で亡くなってしまう。その後彼女は、相続した亡父の遺産により富裕な生活を享受する一方、生涯アイルランドの愛国運動に挺身する。

以上が本書の書かれた背景であるが、本書の第1章は

「お前は何ものも、死さえ恐れてはいけないよ」とTommyが語った。²

という印象的な言葉から始まっている。Tommyというのは彼女の父の愛称で、これは幼い彼女を腕に抱き、彼女の母の棺の傍らで語られた言葉であった。これは、幾度となく命の危機にさらされ

乍ら、自らの命を賭してアイルランド独立に身を捧げた彼女の生涯を鑑みた場合、大変示唆的なエピソードで、彼女は父の言葉そのままに生きたと言えるであろう。

実は彼女は前述のW. B. Yeatsの永遠の恋人でもあった。彼女は本書で、毎週1回政治や文学を語る非公式な会合である、Contemporary Clubの集いで、IRB（アイルランド共和国同盟）の指導者であるJohn O'Learyを紹介され、その翌日彼女は、アイルランドの歴史や文学の本を借りる為彼の家を訪問したと述べ、その時の様子を彼女は次のように記している。

お茶を飲んだ後、O'Leary氏は、主にYoung Ireland Literatureのかなりの数の書物を選び、それをWillie Yeatsが私の家へ持ち運ぶのを手伝ってくれた。³

一方、本書で初対面からこのようにWillie Yeatsと愛称で表記されているW. B. Yeatsは、彼女との初対面の様子を彼のMemoirsの中で次のように述べている。

私の人生の苦悩が始まった時、私は23歳だった。私はJohn O'Learyの姉のO'Leary嬢からの手紙で、時折り、ダブリンの国家独立運動の為総督邸での交際を絶った、美しい女性の消息を聞いた。後になって思うと、彼女の名前を初めて目にした時、何かの予兆のような興奮を覚えたのは確かだった。

やがて彼女は、John O'Learyから私の父に宛てた紹介状を携え、Bedford Parkの我々の家に馬車でやって来た。私は生身の女性で、それ程の素晴らしい美を備えた女性には会った事がないと思った。その美は有名な絵画や詩や、何か伝説上の過去に属していた。⁴

このように初対面についての二人の記述には相違があるが、これは文献からW. B. Yeatsの記述の方が正確であると判断される。恐らく、これはアイルランド最大の詩人の一人であるといっているW. B. Yeatsとの彼女の初めての対面を、アイルランド最大の愛国的英雄の一人John O'Learyとの対面

に結び付ける事により、本書に劇的な効果をあげる事を狙ったのかも知れない。

Maud Gonneは前述のように、evictionを目撃した事からアイルランドの自治と独立を求めて、反英運動に身を捧げていき、彼女は初めての選挙応援演説を1889年に行った。その時彼女は1500人の聴衆を前にして、突然紹介され急に演説をした時の模様を次のように記している。

私が目撃し、大変恐ろしい思い出として残っている、見たままの光景の話をするのはたやすい事だった。私は50年前に建てた家から追い出された老夫婦、1歳の赤子を抱えて路傍に放置された女性、雨の中で虚しく火を燃やそうとしていた幼い子供達、詰め込まれた救貧院や離散した家族の惨めさについて語った。私は自分が何処にいるのか忘れたが、突然我に返り、森閑として静まりかえり無数の目私を見詰めているのに気づき、私の心は完全に虚ろになった。私は演説の途中で話をやめると膝が震え始め、そうして腰を下ろすと泣き始めた。⁵

この印象的な演説により、彼女はその選挙を勝利に導く。新聞は、この美貌の女性による選挙の勝利について書き立て、彼女はこの衝撃的な政治活動家としてのデビューにより、一躍ロンドンの寵児となる。

更に、彼女はその後、amnesty（国事犯の「大赦」）の運動にも深くかかわる事となる。アイルランドの反英活動家は、イギリスのPortlandの刑務所に収監されていたが、彼女は正体を隠して、彼等の面会に訪れる。彼女はその獄舎内の様子を次のように記している。

我々は廊下を連れて行かれ、2つの椅子のある獄舎に案内された。そこは正に動物園の野生の動物を入れる檻のようで、4フィート程の幅の廊下に面した前方の側には鉄格子が嵌め込まれていた。⁶

ドアが開けられ、囚人達が連れて来られると、彼女は看守達の監視の元、色褪せた囚人服を着せられた囚人達1人1人と個別に面会を行った。彼

女は劣悪な環境におかれた囚人達の訴えに真摯に耳を傾け、数年以内に釈放させると約束し、彼等に生きる希望を与えた。当初無謀と思われたその約束は、彼女達の精魂込めた尽力の結果、見事に果たされる事となった。

1899年にオランダ系南アフリカ移民の子孫である、ボーア人の支配するTransvaalで、彼等とイギリス人との間に発生した紛争、ボーア戦争が勃発した。“England’s difficulty is Ireland’s opportunity”というスローガンの元、彼女はボーア戦争反対運動の先頭に立つ。彼女の活躍は目覚しく、ベルギーのブリュッセルに赴くと、ヨーロッパにおけるTransvaalの代表者であるLeydes博士に面会し、Transvaalに傷病兵運搬船を送る事を申し出た。彼は喜んでその申し出を受けた。次に彼女はイギリスの軍用輸送船の船倉に、石炭に偽装した爆弾を積み込み、途中で爆弾を爆発させてその船を沈めるという計画を打ち明けた。その時の様子を彼女は次のように描いている。

Leydes博士は、肝を潰したように見受けられた。「しかし、そんな事は、戦争行為として認められた手段ではありませんぞ」と彼は言った。「あなたの言っている事は分かりません。陸であろうと海であろうと、あなた方の敵を殺すのに違いがあるようには思えません。女性達や子供達を殺しているevictionや強制収容所は、戦争行為として認められている形態だとでも言うのですか。乗り組んでいる兵士達は、我々両国に敵対している大英帝国によって使われているのですよ」と、私は返事を返した。⁷

結局この計画は実行されなかったが、これは彼女の大胆不敵な性格を物語るエピソードの1つであると言える。

又、この時、アイルランド人のJohn MacBrideという男がIRBのArthur Griffithに勧められて、南アフリカでボーア人の部隊に加わり、少佐としてボーア戦争の最初の戦闘に参加し1年間戦闘に従事した後、1900年11月にArthur Griffithと共にパリにやって来た。その時の様子を彼女は次のように記述している。

Griffithと彼は古馴染みの友人だったので、彼が列車を降りて来た時見分けるのは造作なかった。彼は赤毛の屈強な軍人タイプの男で、皮膚は南アフリカの太陽によって焼かれて赤煉瓦色をしていた。⁸

反英運動を通じて最初は同志の関係であったJohn MacBrideとMaud Gonneは、親密さを増し、結局彼と彼女は1903年2月に結婚し、自叙伝の記述はここで終わっている。

最終節で、本書は最初の“I Saw the Queen”の中で述べたCathleen ni Houlihanのエピソードに戻り、彼女は次のような詠嘆に満ちた心象風景を描く言葉で結ぶ事で、言わば彩りに溢れたキャンバスに比すべき本書に、最後の一刷毛を加えている。

Cathleenが足を休めた小さな石は夜の暗い孤独の中に消えている。それがどうしたというのです。彼女は揺れ動く沼を横切る時、跳び移る別の石を見付けている。彼女の栄誉を輝かせる暁がそれらの全てを暖めるでしょう。というのも火が石の中心にあるからです。暫くはそれらの小石の1つであったというのは幸せな事です。⁹

これ迄述べたように、Maud Gonneは、その迸る情熱に満ちた愛国的革命行為により、近代アイルランド史にはっきりとした刻印を印していると同時に、W. B. Yeatsの絶唱“The White Birds”の中で

私のいとしい人よ、私達は海のみなわに浮かぶ白い鳥になりたいものだ！¹⁰

とうたわれている如く、W. B. Yeatsの美神として、その存在は国や時代を超え不滅の光芒を放っている。

我々は、臨場感溢れる生き生きとした豊富なエピソードに満ちた本書を紐解く事で、近代アイルランド史に関する意味深い新たな眺望を獲得すると同時に、遂に書かれる事のなかったその後半生を、彼女はどのように描いたであろうかと想像の翼を広げる余地を残した、余白の楽しみを享受させてくれるという点で、本書は示唆に富んだ味わい深い

書物と言えるであろう。

注

1. Gonne, Maud, *The Autobiography of Maud Gonne — A Servant of the Queen* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995), p.9.
2. Ibid., p.11.
3. Ibid., p.92.
4. Yeats, W.B., *Memoirs* (London and Basingstoke: Papermac, 1998), p.40.
5. Gonne, Maud, op. cit., p.120.
6. Ibid., p.127.
7. Ibid., p.283.
8. Ibid., p.308.
9. Ibid., p.350.
10. Yeats, W.B., *The Collected Poems of W. B. Yeats* (London and Basingstoke: Papermac, 1984), p.46.

モード・ゴン 『モード・ゴン自叙伝 — 女王のしもべ』 (シカゴ: シカゴ大学出版部, 1995年) 378頁 [日本語未翻訳書]